

車の中のミキ先生

倉 田 侃 司

「入江先生の時は、大朝へも宮島へも、何回も行きようりましたよ。学科長がお変わりになってからは、とん
行かんようになりましたのう」。

また始まった。

一、大学人としてともに生きて

入江学科長時代の初教がどんなに立派だったか、それを口になさる時のミキ先生は、うつとりとした表情。その後が続くのが、「今の初教は——」であり、しめくくりは冒頭の言葉である。

かくして、六月になると、大朝や沼隈の学校へミキ先生をご案内することになる。移動はすべて私の車。その回数はいく回前後になるうか。以下は、車中で見た前学長の一面である。

1、いざ行かん、かの地へ

大朝へ向かう途中、ふたりの話題は体験的教育論。数多くの教え子のこと、一緒に働いてくれた教員のこと、さらにはお世話になった恩師のことなどがポツリ、ポツリと出てくる。

最初は、たんなる「思い出話」だと受けとめていた。しかし、これは深い意味があるのではないかと、思うようになった。というのは、最後には、きまつて「しっかり教育してくださいよ。頼りにしとりますけえの」に収斂するのである。教え子や教員の話は、初教活性化の構想を話されるための伏線であった。

ところが、車が東へ走る時、すなわち沼隈をめざす時は、話題が違ってくる。尾道を過ぎるあたりから、先生の視線は外の風景をとらえて離さない。時折、つぶやくように、ひとりごと。

沼隈の地に入ると、もうがまんできない。口が動き、手が動き、目が動く。

おもむろに、ハンドバックから「キツケグスリ」なるものを出し、一口から二口お飲みになる。いざ出陣、というわけである。

2、着いた先では

大朝では、教育委員会であれ学校であれ、訪問先で、実に丁寧なあいさつをなさる。その中に、その学校で発見なさった事が、ちゃんと入っている。たとえば、子どもがあいさつをして通り過ぎればそのことが、掃除がゆきとどいておればそのことが。

ミキ先生の力をもってすれば、校内を歩いただけでその学校の教育がわかってしまう。細かくも鋭い視線である。この点については、沼隈においても変わりがない。しかし、沼隈では、地域の歴史や人のことが話題になる。そうすることで、ミキ先生は相手と共通の土俵に立とうと努力される。〇〇年、〇〇さんというように、具体的に数字や人名が出てくると、あなたも私も同じ仲間よ、という心情的な接近が見えてくるから不思議である。

ミキ先生が、そこまで意図なさったかどうかは知らない。しかし、今日まで、大朝と沼隈の教育実習が円滑に展開できた背景には、ミキ先生ご自身のパフォーマンスがあつたことは確かである。

もう一つの発見、それは、ミキ先生の時間感覚である。学内では、二十分間でお話をお願いします、と頼んで二十分で終わったためしがない。ところか、訪問先では決して長居はなさらない。せいぜい、十―十五分で事を済ませてしまわれる。もつとも、みろくの里と常石鉄工は例外であるが――。

3、帰りは夢の世界に

さすがにお疲れになったのであろう、ミキ先生の口は閉じたまま。

やおら、ハンドバッグから飲み残しの「キツケグスリ」を取り出して、今度は全部お飲みになる。ゆつくりと、噛みしめるように。

それが終わると、睡眠の時間となる。ふとバックミラーを見ると、こつくり、こつくりと舟を漕いでおられる。

一日三時間眠ればよいのです、とおっしゃるが、昼寝の時間は計算に入っていたのかどうか。

そういえば、こんなこともあった。ノックをしても返事がないので学長室に入った。すると、長イスの上に小さい手だけが見えた。近づいてみると、ミキ先生が倒れたまま。これは一大事とばかり、法人へ連絡したものだ。それはともかく、ミキ先生は後部座席に正座なさるので、急ブレーキは絶対禁物である。車は大衆車でありながら、スピードだけは最高級車なみというところか。

それでも、一度、スピード違反であげられたことがある。一車線から二車線になり、アクセルをぐっと踏んだところで、白バイに見つかつた。

「どうしたんや」

「もつとゆつくり走りんさい、と言われました」

「ほうーや」(そうかという意味)

合掌